

# 官邸崩壊

高嶋哲夫

第六回

## 第五章 反撃

1

四階、五階の監視カメラはすべて破壊した。発見されることなく、自由に動くことができる。

しかし、テロリストたちは三階以下の護りをさらに固めている。

あすか 明日香たちは四階の部屋で身動きができなくなっていた。

「スーザン、あなたを脱出させたいの。官邸の外に出たら、警察の保護を求めるのよ」

「その前にテロリストに見つかり、捕まるか殺される。ここから逃げ出すのはムリよ」

「私が約束する。あなたを無事にお母さんのもとに返してあげる」

明日香は興奮して涙ぐむスーザンに、右手を胸に当てて宣誓して

見せた。

しかし、と考えた。このワシントン・ポストの若い女性記者を、なぜテロリストたちは血眼ちまなになって探しているのだろうか。

「なぜ、テロリストたちはあなたをプリンセスと呼んでるの？ 私たちは新崎総理しんざきをクイーン、前の総理はキング。符丁ふちようで呼ぶ。彼らは国の統率者。女王様、王様。当然の呼び名でしょ。プリンセスはお姫様、なぜあなたをそう呼ぶの」

「分からない。本当よ。私は母子家庭で育って、ママは決して裕福じゃない。やっと高校を卒業したシングルマザー。仕事をいくつも掛け持ちして私を育ててくれた。だから、私には大学に行けって励ましてくれた」

「じゃ、お父さんは？」

「私が生まれてすぐ家を出て行ったの。ママはそう言ってた。だから、会ったこともないし、写真を見たこともない」

「ごめんなさい。イヤなことを思い出させて」

何かあるとすれば父親に関してか。明日香は思った。

「パパのこと聞かれるの、ちっとも苦痛じゃない。むしろ、想像力が膨らむわ。どこかの国の王様か、凄にお金持ち。アップルやグーグルのような」CT企業の創業者かも知れないって」

スーザンは笑みを浮かべたが、どこかぎこちない笑い顔だ。

「そうだったらいいね。うちは家族で暮らしてるけど、両親も弟もかなり変わってるから」

明日香も家族について話した。話しながらも、これからどうするか。官邸からの脱出方法を考えていた。

官邸内の排煙装置はフル回転していた。二階に立ち込めていた発煙筒の煙はほとんど排気され消えている。

「女一人をなぜ捕らえることができない。射殺してもかまわん」

ライアンは怒りを隠しきれず、大ホールを歩き回っていた。

声を上げるたびに、人質たちの間に緊張が走った。

「アメリカサイドはうまく進んでいるの？ これはただの人質を捕つての占拠じゃない。アメリカを変える行動であり、必ず国民とマスコミの支持を得られる。我々は強いアメリカをつくり上げる。大きなことを言つてたけど、アメリカ政府の発表では、テロリストとは一切の交渉をしないよ。我々の行動は、ただのテロ活動と見られる」

マギーがライアンに皮肉を込めて言った。

「まだ分かん。アメリカ政府は、我々の要求二つを国民に向けて発表していない」

「我々の要求二つって、あんた知ってるの。私は何も聞かされてない」

「一つは二億ドルの金を要求だ。ここの全員で分けても十分な金だ」  
「ただし、手に入ればね」

マギーはヒューと口笛を吹いた後、大げさに肩をすくめて見せた。

「もう一つは何なのよ。私たちは聞いてない」

「あるプロジェクトの中止だ。アメリカを救う作戦だ」

「金と救済か。両極端ね」

ライアンのスマホが鳴り始めた。

〈プリンセスの出番が近づいている。身柄は拘束こゆうしているか〉

落ち着いた明瞭な声が聞こえる。

ライアンは思わずスマホを持つ手に力を入れた。感情を消した声だけに、不気味さとともに威圧感を覚えるのだ。

「女と一緒にいるようです。訓練を受けた女で、おそらく警護官の一人です」

〈私が聞いているのは、プリンセスだ。まだ拘束はできていないのか〉

「検索していません。時間の問題だと——」

〈一時間前と同じセリフだ。私が求めているのは言葉ではなく、結果だ。生身のプリンセスだ。手段は問わない。一時間後の私の電話では、プリンセスの声が聞けることを望む〉

電話は切れた。ライアンは部下に向かって怒鳴った。

「プリンセスを見つけ出せ。手段は問わない」

「なにブチ切れてるの。アメリカサイドから何を言ってきたの」

マギーが鼻で笑いながら言う。

「女の出番が近づいてるらしい。一時間以内に探し出すんだ。手段は問わない」

「女の正体は何なの。プリンセスなんて、大そうな名前を付けて」  
「俺もよく知らない。しかし、大統領に関係がある女らしい。大統領の意思を曲げさせることのできる女だ」

「大統領の女か。でも دونالد 大統領は七十二歳、プリンセスとかいう女は二十五歳でしょ。いくら女好きの大統領でも、孫みたいな女よ。どういう関係か聞いてみたら」

「マギーが挑発するように言うが、ライアンは冷ややかな目で見つめるだけだ。」

「女が何であろうと関係ない。さっさと仕事を済ませて、俺は国に帰りたい。大金を持ってな」

ライアンは視線を人質たちの方に向けた。

2

ライアンはテーブルの脚を蹴飛ばした。

ドンという響きと共に燭台ろうたいが倒れた。どっしりした木製のテーブルだ。

人質たちがいっせいにライアンの方を見た。

「プリンセスはどこに行った。官邸内にいるのは確かなんだ」

「監視カメラを壊して、妨害電波の発生器を破壊した女を先に見つけて、殺した方がいいんじゃないの。その女、既に外部と連絡を取ってるかもしれない」

マギーが挑発的にライアンに言う。

「なんで、そんな女が紛れ込んだ。その女も警護官の一人か」

「日本の総理は女よ。一人くらい女の警護官がいてもおかしくはない」

「名前を調べるんだ。筒井つひを呼べ」

筒井は七名の日本人部下とともに、人質の見張りと言邸外の動きをチェックしていた。この占拠に対する日本のマスコミのとらえ方と動きだ。

「総理には女の警護官がついているのか」

ライアンは筒井に聞いた。彼はしばらく考えていた。

「俺は聞いたことはない。今まではいなかった。しかし新崎に代わってから、いても不思議じゃない」

「だったら、調べてくれ。名前と写真、家族だ。その他に、分かることはすべてだ。現在、暴れている女が、その警護官かもしれない」

ライアンの言葉に、筒井は人質に目を向けた。

筒井は人質たちの方に行った。

「誰か知ってるか。女の警護官がいるのか」

大声で話しながら、一番手前にいた中年の男の襟首えりくびをつかんで立たせた。

「おまえ、知ってるか」

「私は国際部の新聞記者だ。アメリカの国務長官に話を聞きたくて

来た。警護官については何も知らない」

「誰か、知ってる奴はいないか。官邸の者なら知ってるだろう」

筒井は男の額ひたいに拳銃を突きつけた。

「やめてくれ。官邸に来るのは初めてなんだ」

「その人は私も初めて見る人。官邸内部については何も知らないわ。放してあげて」

新崎総理が立ち上がった。

「だったら、あんたが言うんだな。女の警護官の名前だ」

「私が言うはずないでしょ」

新崎は強い意志を持って筒井を見ている。

「信念と責任感の強さで、人は意志を曲げないと思われがちだ。しかし、それは間違いだ。自己保身のためだ。簡単にしゃべる奴と思われたくないからだ」

男は下を向いたままだ。その髪をつかんで上を向かせた。

「人のためだと言い訳さえつけば、意志などすぐに消え去る」

筒井の顔には笑いが浮かんでいる。

「おまえの強情のせいでこの男が死ぬことになる。そんなことが起こらないようにしゃべるんだ。それならおまえも言いやすいだろう」

新崎は筒井を睨みつけている。

銃声が響いた。同時に人質の中から女性の悲鳴が上がる。

新崎は思わず目を閉じていた。

目を開けると、足元には男が右のこめかみを押さえてうずくまっ

ていた。手の指の間から血が流れている。筒井が男の耳を撃つただ。

「どうってことない。当分耳鳴りが続き、メガネが掛けられなくなるのは不自由だが。恨むなら、この女総理を恨むんだな」

筒井は男から新崎に視線を向けた。

「耳の次はどこがいい。鼻か、もう一方の耳か。あごってチョイスもある。自力で食えなくなるのは辛いぜ。あんたに決めさせてやる」  
銃口を新崎の頬に付けてきた。火薬が爆発したときの熱が肌に伝わり、反射的に身体をそらせた。

「その前に、その人の治療をして。このままだと、血が止まらない」  
筒井は部下に、男の治療をするよう指示した。

「夏目明日香、私の警護官よ」

新崎は姿勢を正し、筒井に強い視線を向けた。

「彼女は最高の警護官よ。名前を言ったくらいじゃ、あなたたちに捕まらない。必ず私たちを救い出してくれる」

「せいぜい祈ってってくれ。世の中、思い通りには行かないものだ」  
筒井がタブレットに名前を打ち込む。

「載ってるぜ。世間にはバカが多いからな」

タブレットを新崎に向けた。

「総理を護る美人シークレット・サービスか。かわいいすぎる警護官、写真付きだ。ほんとに可愛いぜ。この女が官邸で暴れまわっているとは信じられないな」



新崎総理に寄り添うように立ち、周囲に視線を向ける夏目明日香のスナップ写真がタブレットの画面いっぱいに貼り付けてある。ライアンが筒井の手からタブレットを取り、見つめている。やがて筒井に何事か告げると、筒井は部下を呼んだ。

3

ホワイトハウスの大統領執務室には、三人の男がいた。

ドナルド大統領はデスクに座り、前のソファーにはトーマス・ロビンソン首席補佐官とビン・コナー国務副長官が座っている。

「やはり、テロリストとは交渉はしないで押し通そう。ワールド・エナジー・カンパニーのCEO、スチュアート・ランケルには来年また世話になる。恩を売っておくことに越したことはない」

大統領は二人を交互に見て言った。

「国防総省に連絡します。チャンスを見つけて、強制突入を試みるようにと」

「日本政府にも連絡してくれ。アメリカ合衆国は、自由と民主主義に敵対する何者にも屈しないと」

日本の総理とアメリカの国務長官と駐日大使夫妻、さらにその他の人質を見捨てるといふことだ。いや、救出には全力を尽くす。ただその割合は低くなる。

一時間後には合衆国政府の基本方針として、テロリストとは一切

交渉はしないと発表された。

デスクに置いてある大統領のスマホが鳴り始めた。非通知の文字が出ている。

呼びかけたが返事はない。大統領の脳裏に前の電話の音が蘇よみがえった。

「おまえは誰だ」

相手は沈黙を続けたままだ。

「私は忙しいんだ。この番号の相手が誰だか知っているのか」

〈知ってるわ、チェス。チェスなんですよ。チェス・ドナルド〉

今度は大統領が沈黙した。その声から記憶の断片が心の奥から引き出されてくる。歯切れのいい多少甲高い声。年を経て、角が取れて丸みを帯びた声に変わっているが間違いない。

首席補佐官と国務副長官が大統領に視線を向けている。大統領は二人に背を向けて窓際まで歩き、声を潜めた。

「コニー・ハザウェイか」

〈驚きだわ。覚えててくれたのね。なんて説明しようかと、ずっと迷ってたの。二十六年も昔の話ですものね〉

「元気かね。私は元気だ」

〈バカな挨拶はやめて。テレビを見てりや、そのくらいは分かるわよ〉

「私の支持者か。ありがたいね」

〈幸せな人ね、昔から。本気でそう思ってるの〉

「で、何の用だ。金か。いくらほしい」

〈やめてよ、失望させるのは。私の声と名前を憶えててくれて感激してたのに、興ざめじゃない〉

「謝るよ、悪かった。しかし、君もマスコミによって知ってると思うが、現在私は忙しい。落ち着いたら私の方から連絡する」

〈スーザン・ハザウェイ。この名前知ってるでしょ。この電話をかけると言った人が、知ってるはずだからって〉

「ワシントン・ポスト紙の政治記者だ。彼女がどうかしたのか」

〈やはり知ってたのね。だったら、今、日本で人質になってることも知ってるわね〉

「同じハザウェイだな。きみの親戚か」

〈そうよ。助けてほしいの〉

「もちろんだ。全力を尽くしてる」

〈うそでしょ。テロリストとは交渉しない。これが政府の方針なんでしょ。人質なんか、殺されてもいい。あんたらしいわ〉

「だが、そんなこと言った。救出に全力を尽くしてる」

〈証拠を見せてほしい〉

「結果を見せてくれ」

〈昔、同じような言葉を聞いた記憶がある〉

冷めた声が返ってくる。大統領は必死で二十六年前の記憶を引き出していた。シカゴでひと月間の出会いだったはずだ。

〈いいことを教えましょうか〉

「きみの電話よりいいことがあるのか」

〈昔と変わらないわね、泣かせるようなことを言うのは。あのころ、私は十六歳になったばかりだった〉

コニーが十六歳を強調する。

〈スーザンはあなたの娘よ〉

大統領は絶句した。何度目かの沈黙が続いた。

〈あのときあんたは、四十六歳。問題なのは——〉

「きみはたしか——」

大統領は呻くような声を出した。

〈十六歳だったと言ってるでしょ〉

「嘘だ。十九歳と言った」

〈覚えててくれたの。意外ね〉

大統領の脳裏には、自分の置かれている様々な状況が駆け巡った。

アメリカ合衆国の法律では、十六歳以下の異性とのセックスは重罪であり、仮釈放なしの懲役十年以上という州もある。

「本当にスーザンは——」

〈マスコミが飛んでくる。今はDNAを使った親子判定があるんでしょ。精度は百パーセントに近い〉

「どうしたいんだ、きみは」

〈スーザンを私のもとに帰してほしい。もちろん、元気なままで。

私が望むことはそれだけ〉

コニーの背後に誰かがいる気配がする。

電話は唐突に切れた。

大統領はしばらくスマホを耳に当てたまま立っていた。

「どうかしましたか」

首席補佐官の声で我に返り、あわててスマホを切った。

「今の電話の逆探知はできないか」

「さほど難しいことではないでしょう」

首席補佐官が言った。

4

遠山とおやまは阿佐ヶ谷あさがや駅を降りた。スマホの地図によると、夏目明日香

の家は、駅から徒歩十分ほどのところだ。

駅前の繁華街を抜けて歩いた。

NATSUMEと木に彫ったB4サイズのバカでかい表札がかかっている。四人の名前が彫っており、ASUKAの名前もある。空いている所にカラフルな似顔絵が彫ってあった。若い女性が明日香だろう。ユニークな家庭だと言っていたが、確かにそのようだ。

遠山はインターホンを押した。

誰ですか、と不愛想な声が聞こえてくる。電話を掛けたときに戻ってきた若い声だ。

「東京政経新聞の遠山です」

へさっきの電話の人か。話すことはないって言っただろ」

そういうとインターホンは切れた。遠山は再度インターホンを押し続けた。

「お姉さんのことが知りたくないのか。きみより、俺の方が情報は多いと思うが」

考える気配が伝わってくる。

「きみだって、お姉さんと話したんだろ。無事なことを知っている」返事がこないと思っていたら、ドアが開いて、痩せて小柄な少年のような顔が覗いた。

遠山はドアの前に行くと、隙間に足を入れた。

諦めたようにドアが開いて、中に入るように彼が言った。

「きみが純次じゆんじくんだね。お姉さんはなんて言ってた」

「急ぐなよ。両親がいるんだ。二人の前で姉さんのこと話してくれるか」

「もちろんだ。ただし、多くは知らない」

遠山は相手の話を引き出しながら、明日香の家族三人の前で、現在の状況を話した。

「分かっているのは、生きてるってことだけか。姉貴のことだから、もっと派手なことをやってるんじゃないかと思ってた」

「派手なことをやってれば、とつくに殺されてる」

「警護官が全員射殺されたって本当なの」

黙って遠山の話聞いていた母親が、おそろおそろ聞いてくる。

「残念ながら——」

「姉貴が死ぬわけがないと思ってたけど、他の警護官が全員殺されたと聞いてたから——母さんなんか——」

純次は途中から黙り込んだ。家族全員が心配してたってことだ。

後輩の女性記者から送られてきた資料には、長男はコンピューター・オタクのロリコンと書いてあった。

しかし目の前の若い男は、かなり高揚こうようしているが姉思いの普通の青年だ。

「家族もどこかに避難した方がいい。姉さんが生きていると分かれれば、マスコミが押し寄せる。テロリストの仲間が官邸の外にもいる可能性は高い。必ず何かやってくる」

「この家もテロリストに占拠されるってことか」

「姉さんを捕まえるために、家族が利用されるってことだ」

「僕たちのことなんて知らないだろ」

「俺が知ってるんだ。一介の新聞記者の俺が。相手は、総理大臣とアメリカの国務長官を拘束して、官邸を占拠している連中だぞ。俺なんかより、はるかに情報量も多いし、組織力、機動力のある連中だ。警護官を皆殺しにするような奴らだ。本物の軍事訓練も受ける」

「じゃ、どうすればいいんですか」

純次が素直に聞いてきた。

テレビの前の父親が、胡散臭うさんくさそうに遠山を見ている。

「すぐに家を出る用意をするんだ。ここから避難する」

遠山の言葉に純次が立ち上がった。

「車を持ってきます。近所の月極つききくの駐車場に停めてあります」

「急いでくれ。下手すると、きみらもテロリストに捕まることになる」

「十分で戻ってきます」

純次が家を飛び出して行く。

遠山は両親を促うながして、家をしばらく留守にする準備をするように言った。

十分後に家の前に車の止まる音がして、純次が部屋に飛び込んでくる。

家の前には赤い軽自動車が止まっていた。

遠山と夏目家の三人は、純次が運転する車から家を出た。

「どこに行くんですか」

「まずは、うちの新聞社に行こう。まさか、新聞社にいるとは思わないだろう。銀座方面に行ってくれ」

助手席の遠山が答える。

「独占取材ってわけですね。取材料って出るんですか」

純次がアクセルを踏み込んだ。

警視庁に設置された国家安全保障会議では、梶元副総理たかやまが高山警視総監と田島警察庁長官の言葉を聞いていた。



「アメリカ軍の特殊部隊が、完全武装で基地外に出るとするのは問題でしょう。マスコミに漏れれば大騒ぎです。しかも人質救出とはいえ、国内で警視庁、あるいは自衛隊と合同作戦を行うのです。日本側に死傷者が出た場合、違憲問題にもなりかねません」

警視総監は、アメリカの特殊部隊を投入するのに反対なのだ。警視庁の危機管理体制、対応能力への信頼性を疑うことになる。

警察庁長官が無然とした表情で言い放った。

「この非常時だぞ。そんなことを言っているから、国際社会から日本はバカにされ、信頼されないんだ」

「法的な問題です。それなりの手続きが必要ですよ。実弾入りの武器を外国の軍人が携行して、霞ヶ関、永田町を闊歩かつほするのです。一般市民が傷つくようなことがあれば、国際問題になります」

警視総監の声が大きくなった。

「日本を訪問する外国の要人を護衛する彼らの国の護衛官が持つ武器も、すべて許可を取ったモノです。我が国は銃規制を徹底している。だから、日本はアメリカより安全なんだ」

「ネイビーシールズが日本側と協力すると言っているのです。すでにS A Tは大きな打撃を受けています。自衛隊の特殊部隊と組めばいい」

警察庁長官は言い切った。彼はこれ以上、事態を悪化させることには何としても反対なのだ。自分の責任問題になる。いや、すでになっている。

梶元は二人の話を聞きながら、決めかねていた。

「官邸に残っているという警護官からの報告はないのですか」

「夏目という女性警護官です。高見沢警部補も残っているが、負傷しているようです。かなりひどいと言っていました」

「すべての協力を受け入れましょう。事態をこれ以上悪化させることだけは防がなければなりません。早急に、ネイビーシールズを受け入れてください。必要な許可があれば、直ちに取るように」

梶元は秘書に、アメリカ政府に直ちに伝えるよう指示した。

横田は警察車両の前で待っていた。

眼前には総理官邸がいつもと変わらぬ、穏やかな姿で建っている。中で起こっていることを考えると不思議な気分だった。

三十分後には横田基地から完全武装した二十五名のネイビーシールズがやってきた。ヘリで日比谷公園まで来て、自衛隊の車両に乗り換えて到着したのだ。

全員黒ずくめでMP5で武装し、暗視スコープ付きのヘルメットを被っている。最後尾の男はスナイパーライフルを持っていた。

アメリカ人通訳と一緒に、シールズの指揮官と副官がやってきた。

指揮官は四十歳前後の黒人で、エイブル海軍少佐と名乗った。

横田は彼らを連れて指揮車に入った。

「この事態の概要はつかんでいます。間違っていることがあれば言ってください」

エイブルは、昨日の夜から現在に至るまでの経過をほぼ正確に話した。

「これらの内容は国防総省から上がってきた情報です。官邸の詳細については分かっていません」

横田はモニター画面に映る官邸と周辺の状況について話した。

「地下道を通って侵入を試みたS A Tが全員死亡と聞いています」

「全員死亡ではありません。二人は救出され、病院で治療を受けています」

「突入したのは」

「二十五名です」

半数以上がまだ埋まったままだ。救出した二人も最後尾で埋まっていたのを救出したのだ。一人はまだ意識不明だ。救出作業はまだ続いている。

「テロリストたちはミサイルを持っていて、民間のヘリが撃墜されましたね。空からの侵入は難しい。他に侵入経路は？」

「正面突破か、側面の塀を乗り越えるかしかりません」

「監視カメラと塀上部の圧力感応センサーの電流が邪魔ですね。奇襲の直前に、それらの電源を破壊します」

エイブルは当然という顔で言う。

そんなことをした時点で人質の命が危険だ。横田はあわてて付け加えた。

「我々は現在、強行突入という選択肢は考えていません。アメリカ

側は人質を安全に救い出す策があるのですか」

「強行突入時、援護をするように命令を受けています。我々の準備はいつでもできています」

そんな話は聞いてないぞ、と思いつつながら横田はエイブルの話聞いていた。

5

ライアンと筒井は、新垣総理を連れて地下の管理センターに行った。

そのこのマイクを使えば、官邸全体に呼びかけることができる。

「総理大臣として女警護官に指示を出すんだ。既に任務は終わった。

直ちに出てくるようにと。呼びかけに応じれば危害は加えない」

筒井の言葉に新崎は答えない。

低い音が部屋に響く。筒井が頬を殴ったのだ。

「分かった。でも、彼女は私の呼びかけくらいで出てこないわ」

「黙ってやればいいんだ」

筒井がマイクを握った。

「夏目明日香、新崎総理の警護官だな。この名前はおまえのボスが教えてくれた。この声は聞いているんだろ。おまえのボスから話がある」

筒井は新崎の口元にマイクを近づけた。

「もう任務は終わった。おとなしく出てくれば危害は加えない。おまえから、出てくるように言っただけでいい」

新崎は一瞬、顔を遠ざけたが、筒井を睨んで背筋を伸ばした。やがて諦めたようにマイクを取って話し始めた。

「夏目警護官、私は新崎よ。聞いてるわね。ゴメンね、あなたの名前を言ったのは私」

新崎は何かを求めるように辺りに視線を漂わせた。

ライアンがこれから起こることを興味深げに見つめている。

「あなたの任務は私を危険から護ること。でも、今、あなたの任務を解きます。今後、あなたは自由に動きなさい。私の生死にかかわらず、テロリストたちと戦いなさい。あなたは——」

筒井が新崎の手からマイクを奪うと、そのマイクで殴りつけた。

新崎の額が切れて血が流れている。

「絶対に出てきちゃダメよ。彼らはあなたを殺すつもり。他の警護官は全員殺された。私の命はどうなってもいいから、あなたは——」

マイクに向かって大声を出す新崎を再度、筒井が殴りつける。

「何ごとだ。この女は何を言った」

ライアンが聞いてくる。

「俺たちと戦うよう女警護官に言った。自分の生死にかかわらずだ」

筒井が新崎を睨んで言う。

ライアンが筒井からマイクを取った。

「英語は分かるか。分からなければ、プリンセスに通訳してもらえ、

ナツメ。一緒にいるんだらう。俺たちの仲間はどこにいる者だけじゃない。今ごろ、俺の仲間たちがおまえの家族のところに向かっている」

ライアンは二度繰り返し返して、マイクを切った。

「大ホールからも官邸全体に放送できるようにしてくれ」

「このマイクを使って。官邸内ならどこにいても、管理センターに電波を飛ばせる。官邸全域に放送できる」

マギーがライアンに別のマイクを渡した。

ライアンは新崎を連れて大ホールに戻った。

人質たちが恐怖に怯えた視線を向けてくる。彼らも放送を聞いていたのだ。

ライアンは、新崎に人質たちのところに戻るよう指示した。

高見沢が閉じていた目を開けた。何かを探るように、辺りに視線を向けている。

「テロリストが放送を始めた」

明日香は唇に人差し指を当てて耳をすませた。

官邸内のスピーカーから日本語が流れ始めた。男の声だ。

大ホールで見かけた、目つきの鋭い男だらう。ずっと心の隅に残っていたが、あの男は筒井信雄だ。左翼過激派で「赤色戦線」の議

長だ。すでに二十年以上前から、爆弾犯として全国に指名手配されている。新宿駅前広場で爆弾を爆発させ、死者三名、重軽傷者三十

六名を出している。死者の中には三歳の子供もいた。

警察官になって以来、週に一度は二、三時間かけて指名手配犯の写真を見るようにしていた。何年も前の写真の場合は、顔の輪郭や表情をいろいろ変えてみて、現在の姿を思い描いていた。

警護官になってからは、過激思想を持つ指名手配犯は特に念入りにチェックしている。筒井はあまりに変わっていて、すぐには思いつかなかった。明日香が見ていた写真は二十三年前のものだ。しかし姿かたちは変えられても、瞳だけは変えることができない。

スーザンが放送の中で明日香の名を聞いて、明日香の方を見た。放送は女性の声が変わった。

「新崎総理——」

明日香の口から乾いた呻きのような声が出た。動きを止め、硬い表情で聞いている。

「女性の声は新崎総理ね。あなたの名前が出ていた。彼女があなたのことをテロリストに話したの」

放送が終わってから、スーザンが聞いてくる。明日香は頷いた。

「最後の声がテロリストのボスね。プリンセスという言葉も出た。

官邸の外にもテロリストの仲間がいると言ってる。あなたの家族を

——

「それ以上言わないで。英語は私にも理解できた」

明日香はかすれた声を出した。

自分の名前を教えたのが新崎であつたら、やむをえない事情があ

ったのだろう。任務を解くと言われても、どうしていいか分からない。  
い。

「必ず、私が総理を救い出します」

強い意思を込めて呟くように言った。

明日香はスマホを出して、横田を呼びだした。

「私の正体がばれました。新崎総理は無事です。テロリストは私の家族に危害を加えようとしています」

〈直ちにきみの家族を保護する〉

夏目明日香巡査部長の家族を保護しろ。彼女は実家に住んでる。阿佐ヶ谷だ。横田が部下に指示する声が聞こえた。

〈他に情報はないか〉

「プリンセスのことを言っていました。スーザンのことです。彼らは私とスーザンが一緒にいると知っていました」

〈スーザン・ハザウェイについてはアメリカ政府に問い合わせ中だ。分かり次第、連絡する〉

明日香はスマホを切った。

6

車は青梅街道を都心に向かって走っていた。

純次が運転しながら、バックミラーをチラチラ見ている。

「つけられてる。二台置いて後ろの黒の四輪駆動車」



遠山が見ると、サングラスをかけた外国人の男が運転している。助手席の男もサングラスをかけた外国人のようだ。後部座席にも二人乗っている。

「次の交差点で左折しろ。ウインカーは曲がる時、ギリギリに出すんだ。いや、出さずに曲がれ」

純次が遠山の言葉に従う。背後の四輪駆動車はそのまま直進していく。

「違った。考えすぎなのかな」

しばらく走ってから元のルートに戻ろうとしたとき、横道から行きすぎたはずの四輪駆動車が飛び出してきた。遠山たちの車はその横をかすめるように通りすぎる。

バックミラーに、四輪駆動車がすごいスピードで近づいてくるのが見える。

「スピードを上げる」

「あいつらなの。僕たちを狙ってるテロリストは」

純次がしゃべっている間に、車が横に並んだ。

遠山たちの車を追い越すなり、タイヤ音を響かせて前に曲がり込みスピードを落とす。純次が急ブレーキを踏む。車体を大きく回転させながら後部を相手の車にぶつけて止まった。

「おい、ジュン。注意しろ、新車なんだぞ」

後部座席から父親が身体を乗り出して怒鳴った。

「逃げ、逃げるんだ。あいつら、テロリストだ」

ふりむいた遠山は叫んだ。

四輪駆動車のドアが開き、拳銃を持った男たちが降りてくる。

純次はエンジンをかけ直すと、バックギアに入れてもう一度、相手の車にぶつけて走り出した。驚愕した顔で飛び退いた男たちが、あわてて車に戻っていく。

「どこに行くんだよ、僕たち。あいつらまだ追ってくる気だ」

「新聞社は中止だ。警視庁だ。あの辺りは警官隊が取り囲んでる。あいつらも追っては来ないだろう」

車は青梅街道を都心に向けて疾走した。

突然、車のスピードが落ちた。信号機が黄色に変わっている。

「なにしてるんだ。追い付かれる」

「信号が赤に変わる」

「行け」

遠山が腕を出してクラクションを鳴らした。

それに押されるように車は赤信号の中に飛び出した。

交差点を渡り終わったとき、黒の四輪駆動車が交差点に進入した。ガン、という音が追いかけてくる。

「何が起こったの」

ハンドルにしがみ付いている純次が聞いた。

「テロリストの車に横から来た車が衝突してる。警視庁に急げ」

車は六本木通りに入った。両側には警察車両が見え始めている。

「正面は進入禁止になっている」

「まっすぐ進め」

車は赤い三角錐さんかくすいの車止めを跳ね飛ばして前進した。  
十人以上の警察官たちが飛び出してくる。

「わきに寄せて停めろ」

車が停まると、拳銃のホルスターに手をかけた警察官たちが寄ってきた。

遠山はスマホを出して電話番号を表示した。

「横田か。遠山だが相談に乗ってもらいたいことがある」

遠山は事情を話し始めた。

明日香とスーザンは壁にもたれて目を閉じている。高見沢を囲むように床に座っていた。

明日香はスーザンを官邸外に出す方法を考えていたが、いい方法が浮かばない。同時に家族のことが頭を離れない。テロリストが言ったことは本当だろうか。今ごろは――。

床に置いたスマホが震え始めた。待ち受け画面には横田課長の名前が出ている。

〈夏目はいるか〉

「私です」

〈家族は無事だ。警視庁で保護している〉

一瞬、全身から力が抜けていく。張り詰めていた精神が緩んだのだ。心の中は重くひっかかっていた懸念が一つ消えた。

〈やはり官邸外にもテロリストがいた。彼らが家族を襲撃したが、何とか脱出した。私の友人の新聞記者が連れ出してくれた〉

「襲撃したテロリストは」

「逃げられた。車を残していったので現在調べている」

「家族は、事件が解決するまで安全な場所に止めておいてください」  
〈しばらく警視庁にいてもらう〉

横田の背後で話しかける声がする。

〈スーザン・ハザウェイの身元が届いた。読むぞ〉

横田は自分も確認するように読み始めた。

〈シカゴ生まれ、ニューヨーク大卒。ワシントン・ポストの政治部記者。現在、アンダーソン国務長官に同行して訪日中。これだけだ。〉

きみたちが送ってくれた以上の情報はない〉

「そのスーザンをテロリストが血眼になって探しています。必ず他にも何かあるはずです。表面には出ていないこと、アメリカ政府が隠していることが」

〈再度、アメリカに問い合わせる。別ルートも使ってみる。何か分かったら知らせる〉

頑張ってくれ、という言葉と共にスマホは切れた。

「大統領——電話の相手に同行願いました」

首席補佐官が大統領の横に来て、困惑した表情で耳打ちした。

FBIの捜査により、電話の相手は簡単に特定できた。ニューヨ

ーク州マンハッタンのアパートからの電話だった。

相手はコニー・ハザウェイ。同行を願うと、コニーはそれを待っていたように承諾したと報告を受けている。直ちにヘリでワシントンDCに連れられてきた。

「どんな女だ——。いや、言わなくていい。二人だけで会えるように計らってくれ」

「直ちに部屋を用意します」

「いや、ここで会おう。大統領執務室でだ。これはプライベートな会見ではない。これ以上、問題を複雑にはしたくない」

大統領は笑おうとしたが、頬がわずかに引きつただけだった。通されてきた女性は四十代の上品な女性だ。知的な雰囲気も感じられる。身長は百七十センチ程度で細身のブロンド。わずかに残る記憶から想像したのとは別人だった。

「昔とちつとも変わっていない。相変わらずきれいだ、コニー」

「別の人と間違っているんじゃないの。当時、私は十六歳。身長は今より、五センチ低く、体重は同じ程度だった。私は昔の写真を見るのが好きじゃない。別の思い出もあるしね」

大統領と対面しても臆することなくしゃべった。

「今は四十二歳。でもあなたとは親子ほど違ってるということよ。道ですれ違ってても分からないはず」

「私は十九歳だというきみの言葉を信じた。だから——」

大統領は平静に振る舞おうとしているが、声が震えている。

「やめてよ、言い訳は。チェス——いえ、大統領。私はそんなことを話しに来たんじゃない。あなたの娘のスーザンについて、お願いに来たの」

「私の娘のスーザン——」

大統領は絶句してコニーを見つめている。

「そう。あなたの娘よ」

コニーは強い口調で言うと、大統領を見据えた。

「信じられないでしょ。私だって信じられなかった。でも、信じなきゃならなかった。当時、私は高校二年生よ。家族には言えないし、友達にもね。どんどんお腹は大きくなるし」

大統領の視線はコニーに貼り付いている。

「結局、母親に見つかって、正直に話したわ。男に遊ばれて妊娠した、バカで哀れな娘。あなたの名前は出さなかったけどね。その母も二年前に亡くなった。言ってあげたかったわ。あなたの孫は、大統領の娘よって」

コニーの表情が崩れ、頬を涙が伝っている。

大統領は我に返ったように、ハンカチを出してコニーに渡した。

「私は高校を中退して必死で働いた。スーザンはあなたに似て、頭がよかった。成績はいつだってオールA。大したものでしょう。高校中退の母親の娘にしては」

「いや、きみに似たんだろう。私はきみのことを頭のいい女性だと

——」

「とにかく、私もスーザンのおかげで勉強した。普通なら遊園地に行くところを二人で図書館に通ってね。これでも通信制で高校を卒業して、短大を出たのよ。今は法律事務所で弁護士助手をやってる」

「法律については多少、知ってるというわけか」

「いずれ、ロースクールに入って、弁護士になればと思ってる」

「協力するよ」

「そんなことより、今日はスーザンのことを話しに来たの。何としても、スーザンを助け出してほしい」

「コニーが強い意思を込めて言う。」

「日本政府と協力して、全力を尽くしている。いずれ時が来たら、

全員——」

「相変わらず、ウソが上手ね。でも、今の私は簡単には騙されない。」

あのマスコミ発表では、アメリカはテロリストには屈しない。従来の交渉しない態度を貫くと言ってたでしょう。いずれ、武力行使するってことよね。人質の安全なんて顧みず。そうなればスーザンは

——

「国際社会の常識を言ったままだ。裏では——」

「コニーは顔を上げ、大統領を直視した。」

「信じてないんでしょう、私の話」

「突然、言われても——」

「スタチュートリー・レイプ。知ってるでしょう。承認年齢未満の女性との性交。つまり十六歳以下の女の子とセックスすれば、制定

法上の強姦罪になる。まず連邦地裁に申し出て、スーザンとあなた  
のDNA検査をして親子関係を証明する」

「本気か」

「私はそんなことはしたくない」

コニーはポケットからスマホを出した。

「生まれた日から、毎年誕生日に取り続けた写真よ。私はこの習慣  
を今年も、来年も続けたい」

一人の赤ちゃんが少女に成長し、美しい女性へと変わっていく。  
写す者と写される者の心の結びつきを感じさせる写真だ。

大統領は一枚一枚を食い入るように見つめている。やがて、顔を  
上げた。その目は、潤んでいるようにも見える。

「間違いない。スーザンは私の子だ」

「私のスーザンを、必ず私のもとに返してくれるって気になったの  
」彼女は知っているのか。私のことを」

「知らない。取り戻せれば、これからも知ることはない。でも、そ  
うでない場合には——」

「約束する。私の持つ権限と力の限りを尽くして、きみと私の娘を  
取り戻す。そしてきみのもとに帰す」

コニーが大統領執務室にいたのは、ほんの十五分ほどだ。彼女は  
その間に二十五年分の話をして帰っていった。

大統領は窓の前に立ち、コニーの言葉を反芻はんすうしていた。

コニーの言葉は素直に大統領の精神こころに沁み込んでいった。見せら



れた二十五枚の写真が<sup>まぶた</sup>瞼に焼き付けられている。また同時に、コニーの言った制定法上の強姦、と言った言葉が脳裏に刻まれている。大統領はコニーに手渡された一枚の写真を見詰めた。自分に似た目元と口元の娘が、笑いかけている。

7

明日香は官邸の敷地を頭に描いた。  
敷地内には首相官邸と首相公邸がある。

官邸正面には広い庭が続き、その先には柵が設けられ、通常は多数の警官が警護している。夜もライトアップされていて、見つからずにここを突っ切ることは不可能だ。

その他の外周は五メートルを越す高い塀に囲まれている。塀の内側には竹などの高い木々が植えられ、周辺のビルから中が見えにくくなっている。

官邸の外に出て、木々の中に逃げ込めば何とかなるかもしれない。高い塀に囲まれてはいるが、ロープさえあれば越えられないものではない。

「暗くなってから屋上に出て、そこから庭に下りるのはどうでしょう」

「屋上にもテロリストがいる。ヘリは屋上からのミサイルで撃墜された」

「いるとしても数人です。そんなに人数を割きけません。私がなんとかします」

高見沢が明日香を見つめている。その目は無理だと言っている。

「方法はそれしかありません」

「やはり塀を越えるしかないか。俺も考えていた。しかし、テロリストも対策は考えているだろう」

「そう思います。私が考えつくくらいです。敵もきつと待ち構えています。トンネルでのS A T部隊の二の舞にはなりたくありません」

「かなり危険だがやるしかないか」

高見沢が言い切った。

「何とかして官邸から庭に出れば、警察か自衛隊の回収部隊が待っているというのです」

高見沢は答えない。と言うことは、これしかないのか。

明日香は横田に電話をした。

「夜になってから、スーザンを官邸の屋上から裏庭に下ろします」

S A Tか自衛隊の特殊部隊で回収は可能ですか」

横田が考え込む気配が伝わってくる。

「官邸の敷地内に回収部隊を侵入させて、スーザンを敷地から安全な場所に移してほしいんです」

「S A Tを送る。塀の上に設置されている監視カメラと圧力感応センサーを一時切断する必要がある。それができれば、五分で塀を越

えて指定の場所まで移動することができる」

「電源は官邸内部です。地下のセンターでコントロールしています。でも——」

明日香は官邸敷地内の配電図を頭に浮かべた。

「塀に電気を送る変電盤は庭にあります。それを破壊します。監視カメラと圧力感応センサーをダウンさせることができます」

「どこにあるか知っているのか」

「官邸敷地内は自分の家と庭だと思え。高見沢警部補の言葉です」

明日香はスーザンを下ろす場所を指定した。

「変電盤を破壊する前に、レーザーポインターで指揮車に合図します。ただちに回収場所にSATを送ってください。これから準備に入ります」

明日香はスマホを切った。

明日香はスーザンに計画を話した。スーザンは無言で聞いている。

「いやよ、私だけが逃げ出すなんて」

「逃げるんじゃない。外に出て、何が起きているか正確に伝えるのよ。それが、記者としてのあなたの使命でしょ」

「自分の使命を果たせ。俺たちは総理を護るのが使命だ。だから、残って戦う」

目を開けた高見沢が英語で言った。

「分かった。でも、どうやって官邸の外に出るの」

「夏目に聞け」

高見沢は突き放すように言う。明日香が横田やスーザンに話すのを聞いていたのだ。

明日香は官邸の庭の図を描いて、スーザンに説明した。

「屋上からロープで庭に下りる。そこに警視庁のSATが待っている。彼らがあなたを塀を越えて外に連れ出してくれる」

「ロープなんてあるの」

「消防用のホースを使え。おまえなら、担いで行ける」

高見沢が言った。

各階の階段横の非常ボックスに十メートルのホースが二本入っている。つなげば、屋上から下まで下りることができる。

「うまくいくと思うの？」

「私が必ずあなたを護る」

明日香は強い決意を込めて言った。

スーザンの不安そうな顔がわずかにやわらいだ。

「急ぎましょ」

明日香はスーザンを促して部屋を出た。

五階に上がり、非常ボックスからホースを出して一束ずつ担いだ。一束八キロの重さが肩に重くのしかかってくる。スーザンはよろめきながら屋上への階段を上がっている。

「屋上にも、テロリストの仲間たちがいるんじゃないの。ヘリを撃ち落としたのは彼らでしょ」

明日香は答えず、了解の印に自動小銃を軽く上げて見せた。

明日香はスーザンを待たせて、一人で屋上に出た。

屋上は庭の光が十分に届かず薄暗い。いくつかライトはあるが、狙撃を恐れてか消してある。

薄闇の中を冷たい風が吹き抜けていく。空を見上げると、星空が広がっていた。いつもより鮮やかに感じるのは、周辺の高層ビルが自らしゆく消して照明を消しているからか。

複数のテロリストがいるはずだ。気づかれずに彼らを始末しなければならぬ。今度は生半可なことでは命取りになる。自分ばかりではなく、スーザンを含めてだ。

目を凝らすと四方向に四人のテロリストが、手すりの壁に身を隠して座っていた。銃は庭に向けられている。中央に置かれている箱は、ヘリを撃ち落としたミサイルか。

どうやって彼らに近づくか。身を隠すことのできる場所は——ない。だとすると、堂々と歩いていくしかない。

明日香はナイフを抜いて、右手に持って背中に戻した。

北側の角に向かって歩いた。そこからは庭の変電盤が見える。

銃を左肩にかけ、右手に持ったナイフを握り直した。

テロリストが座ったまま明日香を見ている。明日香は軽く左手を上げた。

「どうかしたのか」

訛りの強い英語が聞こえたが、どこの国の訛りかは分からない。

声の相手は——女だ。

「屋上に行くよう指示された」

明日香は銃を肩にかけたまま左手を上げ、短く答えた。他のテロリストにも聞こえたはずだが反応はない。

明日香は歩みを速めた。無防備を示すために左手を身体から離れた。相手も銃は明日香の反対側に向けている。

相手の懐に倒れ込むようにぶつかった。心臓を一突きにしたはずだ。肉を切る感触、骨にぶつかり、さらに体内に入っていく感触。

テロリストは一声も出さずに絶命した。

明日香はゆっくりと身体を離れた。倒れないように注意して、壁にもたれさせた。南側のテロリストが見ている。右手を振って何でもない意思表示をした。納得したかどうか分からないが、何事も起こらなかった。

テロリストの身体を倒さないように注意して、庭の変電盤を探した。外灯の横のうす明かりの中に見えている。あの配電盤で敷地内の監視カメラ、塀上の圧力感応センサー、外灯の電気を全てコントロールしている。ここが一番近い場所だ。外灯の横のうす明かりの中に見えている。

明日香は銃を構えた。自動小銃の連射で十分破壊できる距離だ。引き金を引く前に正門近くに止めてある警察車両に、レーザーポインターの光を当てた。車の赤色灯がついた。作戦開始の合図だ。

銃声とんぱんが轟いた。庭が闇に包まれた。同時に明日香は左右と南側のテロリストを撃った。暗闇に紛れて位置を変えながら、テロリストに向けて発砲する。

銃撃が数秒間続いたが、静かになった。

動きを止めて様子をうかがったが、何事も起こらない。

明日香は屋上への出入り口に戻り、消火ホースを担ぐとスーザンを連れて屋上の端に走った。

ホースの先を柵の金具に結び付け、スーザンの肩を抱いた。

「行くのよ。下に日本の警察官が待っている。彼らが外に連れ出してくる。これは何かあったときのため」

明日香はスーザンに拳銃を渡した。

「あれを見て」

スーザンの指す方を見ると、二つの光の束がゆっくりと移動してくる。光芒こうぼうの先は庭の木々を照らし出している。

「何なのよ、あれは」

「ドローンよ。強力なライトを二つ積んでる」

「さっきの銃撃を聞きつけてテロリストが飛ばした。ここにもすぐにテロリストが上がってくる」

官邸の正面入口から、複数の声が聞こえてくる。庭を走る足音が聞こえ始めた。敷地に潜入したS A T部隊に気付いたのか。明日香の脳裏に官邸地下のS A Tの惨劇が蘇った。

明日香はスマホを出して、横田を呼んだ。

「敵は敷地内への侵入に気づいています。すぐに引き上げてください」

「すでに待機している。スーザンを下ろせ。回収しだい引き上げる」  
「行って。無事を祈ってる」

明日香はスーザンの身体を押しした。スーザンはホースにつかまり下りていく。

闇に紛れて見えないが、複数のテロリストが庭に出ているはずだ。さらにもう一機のドローンがあらわれ、庭を明るく照らしている。「ダメです。敵に悟られている。すぐに引き返してください。ドローンが来ます。早く逃げて」

明日香の声が終わらないうちに、ドローンが官邸の庭を照らし出した。強力な二つのライトが庭の植え込みを照らし出していく。SATの姿が見えた。

明日香はドローンに向けて銃を乱射した。ひとつの光束ひかりが消えた。銃声が響き始めた。庭に潜むSATとテロリストの銃撃戦が始まった。

明日香はもう一つのドローン目がけて銃を撃ち始めた。すぐに弾倉が空になる。

倒れているテロリストの銃を取り、再び連射した。ライトの光が跳ね上がるように空の闇を照らすと、そのまま落ちていく。

明日香の動きが止まった。血の気が引いていく。  
背後で銃声が響き、足元のコンクリートが碎け散った。



「動くと撃つ。ゆっくりと銃を捨てて、こっちを向くんだ」

詛りのあるヘタな英語だが意味は分かった。

自動小銃を下に置いた。手を上げて振り向いた。

自動小銃を構えたテロリストが立っている。

足と右腕を負傷しているようだが、左手で持った銃の銃口は明日香の胸に向けられている。

「おまえが騒ぎの女か。よくも、仲間を殺してくれたな。彼らがあ  
の世でおまえを待ってるぜ。十分に可愛がってもらえ」

銃声が響いた。

(つづく)